

1 文（文章）で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点（独立採点）すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容（語句）などがある場合は、その内容（語句）を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、**一箇所につき1点の減点要素**とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「：とはどういうことか？」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

D

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 答案の文章が最後まで完結していないもの。

d 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。

e 字数指定のある設問で、制限字数の半分に満たない場合は「字数不足」と記し、全体×として、0点とします。この原則と異なる採点をする場合は、採点基準で指示します。

問一 6 点 (模範解答例)

A ○2 点

科学思想史で対象とする自然観や世界観は、集団によってまとめられた社会的なものであり、

B ○2 点

哲学史が対象とする個人が説いた思想とは

C ○2 点

異なるということ。

※A・B・Cに関して部分採点

A 「科学思想史で対象とする自然観や世界観は、集団によってまとめられた社会的なものであり」  
(2 点)

※「科学思想史」の性質の説明。

「哲学史」との対比で、「集団的で社会的だ」ということについて説明する。

△「科学思想史で対象とする自然観や世界観は社会的に形成されたもので」は、「集団」の指摘がない  
ので、▲1 点減点で△1 点。

B 「哲学史が対象とする個人が説いた思想とは」(2 点)

※「哲学史」の性質の説明。

「科学思想史」との対比で、「個人的だ」ということについて説明する。

C 「異なる」ということ」(2 点)

※傍線部「違っている」の言い換え。

○「違うということ」も可。A・Bの違いについて触れている表現は可。

問二 10点 (模範解答例)

A ○2点

思想史というものは、ある哲学の創始者個人の説いた学説を

B ○2点

その弟子たちが当初なかった問題への考察などをして、

C ○2点

長い時間をかけて変形されながら

D ○2点

社会に受け入れられるようにするという、

E ○2点

集団の営みによって形成されるものであるから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

**A 「思想史」というものは、ある哲学の創始者個人の説いた学説を」(2点)**

※「思想史」が「個人の学説」から始まることの説明。  
それが「異端」であることの説明をするのではない。

×「ある哲学の創始者は異端であることが多く」は、×0点。

**B 「その弟子たちが当初なかった問題への考察などをして」(2点)**

※Aの状態であるものに「弟子たちが関わっていくこと」の説明。

**C 「長い時間をかけて変形されながら」(2点)**

※Bの作業を経てDになるために「長い時間」が必要とされ、その結果、当初のものから「変形」することの説明。

△「長い時間をかけて」は、「変形される」ことの指摘がないので、▲1点減点で△1点。  
△「変形されて」は、「長い時間がかかる」ことの指摘がないので、▲1点減点で△1点。

**D 「社会に受け入れられるようにするという」(2点)**

※A↓B・Cの結果を説明。

**E 「集団の営みによって形成されるものであるから」**

※問一で触れた「集団の営み」であることの説明。

問三 12点 (模範解答例)

A ○2点

科学者の思想は、科学が知識人の営みであったことから、

B ○2点

同時代の支配的思想からはみ出る質のものになり、

C ○3点

時に神聖視されたり異端視されたりするといった宗教性を帯びるという点や、

D ○3点

科学者自身のみずからの科学思想を意識しないため史料がとらえ難いという傾向があることなど、

E ○2点

解明の妨げになるさまざまな要素があるから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「科学者の思想は、科学が知識人の営みであったことから」(2点)

※「知識人の営み」であったことの説明。

B 「同時代の支配的思想からはみ出る質のものになり」(2点)

※Aであるため「時代の支配的思想からはみ出る」ことの説明。

C 「時に神聖視されたり異端視されたりするといった宗教性を帯びるという点や」(3点)

※Bの質の説明。

D 「科学者自身のみずからの科学思想を意識しないため史料がとらえ難いという傾向があることなど」(3点)

※A・B・Cに加えて、「科学者が自らの思想を意識しない」点の説明。

E 「解明の妨げになるさまざまな要素があるから」(2点)

※AからC、Dをまとめて、「解明の妨げ」には「様々な要素」があることを説明。

×Dとのかかわりで「史料にとらえ難いから」としてしているものは、AからCを踏まえていないので、×0点。(Eとしての加点はしない。)

問四 10点 (模範解答例)

A ○2点

科学史に載る過去の発見は、

B ○3点

当時の科学者自身はその時代の科学思想とその問題点に

C ○3点

問題意識をもって追究をした結果として得られたものであって、

D ○2点

現代の理解の仕方とは直接的には関わらないものであるということ。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「科学史に載る過去の発見は」(2点)

※「当時の科学者」が現代に残したものであることの説明。

B 「当時の科学者自身はその時代の科学思想とその問題点に」(3点)

※「文脈」の内容の説明。

○「当時の技術的要求、宗教的・政治的課題、個人的な好奇心や経済的要求・名誉心」と10段落の内容をまとめたものも可。

C 「問題意識をもって追究をした結果として得られたものであって」(3点)

※Bに対して科学者が「問題意識」を持っていたことの説明。

D 「現代の理解の仕方とは直接的には関わらないものであるという」と「」(2点)

※構造としてとらえて「現代」とは異なることの説明。

問五 12点 (模範解答例)

A ○2点

科学分野はもともと複数の学問分野にまたがって研究されていて、

B ○3点

現代の個別科学史も歴史的にみると総合科学史にならざるを得ないという面を持っており、

C ○2点

また、科学思想史を研究することで

D ○3点

過去の科学者の問題意識を規定する文脈を知ることができ、

E ○2点

現代の片面的な科学論とは異なる見解を見出すことにつながっていくから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「科学分野はもともと複数の学問分野にまたがって研究されていて」(2点)

※12段落のまとめ。(科学は複数分野のまたがっていること)の指摘。

B 「現代の個別科学史も歴史的にみると総合科学史にならざるを得ないという面を持っており」(3点)

※12段落のまとめ。(Aであるため「総合」である必要があること)の指摘。

C 「また、科学思想史を研究することで」(2点)

※11段落のまとめ。

D 「過去の科学者の問題意識を規定する文脈を知ることができ」(3点)

※11段落のまとめ。「科学思想によって異なること」の指摘。

E 「現代の片面的な科学論とは異なる見解を見出すこと」につながっていくから」(2点)

※11段落のまとめ。(Dの逆のところが現代の主流になっていること)の指摘。

問一

■形式上の不備

- ・文末表現は要素E参照

基準 配点8点

■模範解答例

A ひたすら現実的にのみ生きる人間には、  
B 現実を超越した  
C 果てしない妄想の世界に遊ぶ快感は  
D 理解しえない

ということ。

■採点方法…各要素単独採点

■要素A 「ひたすら現実的にのみ生きる人間(には)」…2点

- ・「ひたすら」はなくても可。

■要素B 「現実を超越した」…2点

- ・「現実の背後にある」も可。

■要素C 「果てしない妄想の世界に遊ぶ快感(は)」…2点

- ・「果てしない」はなくても可。
- ・「遊ぶ快感」に対応する説明がなければ1点

■要素D 「理解しえない(できない)」…2点

- ・「知りえない・知ることができない・わからない」なども可。

■要素E 文末は「〜(という)こと」という形が原則。そうなっていないければ1点減点。

- 形式上の不備
- ・文末表現は要素D参照

基準 配点8点

■模範解答例

A  
妄想に耽る人間の心情など理解できず、自分の前で微笑する筆者が自分を見下す無礼な人間としか思えな  
B  
かったから。  
C

■採点方法…各要素単独採点

- 要素A 「妄想に耽る人間の心情など理解できず」…3点
- ・筆者が妄想に耽っていたと言うことが読み取れば可。「理解できず」は答案全体からそうしたニュアンスが読み取れば良い。

- 要素B 「自分の前で微笑する筆者が」…2点
- ・筆者が微笑していたことさえ読み取れば良い。

- 要素C 「自分を見下す無礼な人間としか思えなかった」…3点
- ・「前の席にいた人物」が筆者の微笑を自分に対する否定的なものを受けとったことが説明されていれば良い。侮蔑・嘲笑など広く許容して良い。否定的評価がなければ0点。

- 要素D 文末が「から・ので・ため」また「〜という理由」など、理由説明の形になっていない場合は、答案全体から1点減点



- 形式上の不備
- ・文末表現は要素E参照

基準 配点8点

■模範解答例

A 科学精神とは、自己を束縛する現実を超えた世界に  
B 論理的秩序を求めた  
C 人間の、  
D 空想力の一端にすぎない

ということ。

■採点方法…各要素単独採点

■要素A 「科学精神とは」…1点

- ・答案中に「科学精神」という語があればよい。

■要素B 「自己を束縛する現実を超えた世界に」…3点

- ・「自己（人間）を束縛する」に対応する説明がなければ2点。

■要素C 「論理的秩序を求めた」…2点

- ・「論理」「秩序」「整合性」などと同等の説明があれば可。

■要素D 「人間の空想力の一端にすぎない」…2点

- ・「空想力」は「妄想（力）」などでも可。

■要素E 文末は「〜（という）こと」という形が原則。そうならない場合は1点減点。

- 形式上の不備
- ・ 文末表現は要素G参照

基準 配点 1 2点

■ 模範解答例

現実の束縛から逃れ、<sup>A</sup> 夢幻世界を自由に逍遙したいと希求する <sup>B</sup> 人間精神が生み出した妄想を、<sup>C</sup> 理屈によつて整合的に解説することは、<sup>E</sup> 再び人間を現実による呪縛に引き戻し、<sup>F</sup> 妄想の持つ豊かな生命を奪ってしまうことであるから。

- 採点方法…各要素単独採点。ニュアンスが正しければ許容。

■ 要素A 「現実の束縛から逃れ」…2点

- ・ 「妄想（空想）」の本質である、現実からの解放という点に言及できていればよい。
- ・ 単に「現実から離れた」「現実の外」としている説明は1点とする。

■ 要素B 「夢幻世界を自由に逍遙したいと希求する」…2点

- ・ 妄想の世界に遊ぶ自由ということに言及できていればよい。

■ 要素C 「人間精神が生み出した妄想を」…1点

- ・ 妄想の自発性という点に言及できていればよい。

■ 要素D 「理屈によって整合的に解説することは」…3点

- ・ 「解説主義」の具体的説明である。ほぼ同意と見なせれば広く許容する。
- ・ 「解説」をそのまま使っているだけの答えは1点とする。

■ 要素E 「再び人間を現実による呪縛に引き戻し」…2点

- ・ ほぼ同内容の説明と見なせれば、広く許容して加点してよい。

■ 要素F 「妄想の持つ豊かな生命を奪ってしまう」…2点

- ・ 本文の「豊かな神話の生命は滅びる」に対応する。ほぼ同内容の説明と見なせれば加点してよい。

- 要素G 文末が「から・ので・ため」また「〜という理由」など、理由説明の形になっていない場合は1点減点。

■形式上の不備

- ・文末表現は要素Fにある説明に従う。

基準 配点 1 4点

■模範解答例

現実から解き放たれた空想の中で、自己を超えたあらゆる他者や事物に寄り添いつつ、その姿を虚構の世界の内に描き出すのが小説家の営みであるが、生身の人間にはやがて必ず死が訪れる以上、妄想する力の喪失と共に小説家としての終末も避けえないだろうという **F** 悲哀に満ちた諦念。

■採点方法…各要素単独採点。ニュアンスが正しければ広く許容して可。

■要素A 「現実から解き放たれた空想の中で」…2点

- ・空想（妄想）によって現実を超越した世界に立つ小説家の在り方が読み取ればよい。

■要素B 「自己を超えたあらゆる他者や事物に寄り添いつつ」…2点

- ・架空の人間や事物を構想する小説家の想像力への言及が読み取ればよい。

■要素C 「その姿を虚構の世界の内に描き出すのが小説家の営みである」…2点

- ・虚構の創造という小説家の営みに言及していればよい。

■要素D 「生身の人間にはやがて必ず死が訪れる以上」…3点

- ・「生身の」はなくても可。死を免れない人間の在り方に言及していればよい。

■要素E 「妄想する力の喪失と共に小説家としての終末も避けえない（だろうという）」…3点

- ・妄想することができなくなれば、小説家としての生は終わるということに言及していればよい。

■要素F 「悲哀に満ちた諦念」…2点

- ・筆者の心情を端的に示す語で答案が閉じられていることが望ましい。「〜と知っている」「〜と知っている（感情）」という形でももちろん許容してよい。そうした形になっていなければ、答案全体から1点減点。
- ・「諦念」はなくてもよいが、「悲哀・悲しみ」に類する語は必須。

三 古文 50点

問一 10点×3＝30点

※(1)～(3)を、ことばを補いつつ現代語訳する設問

(1) 10点

〔傍線部〕

(私は) いくたびか一(賈島の詩を) 誦し一ける一に、文字一五つ一六つ一かへ一たれ一ば、  
(その詩は) わろう一聞こゆる一も一ひとつ一は一興あり。

(模範解答)

A○4点

B○2点

私は賈島の詩を何度か朗詠した後に、漢字を五字六字変えて諧謔的な詩を作ったところ、

C○2点

D○2点

それは原作に比べると見劣りするが、それも少しは興味がある。(10点)

◆各加点要素の加点の条件【A・B・C・Dに関して部分採点】※ことばを補いつつ現代語訳する問題

A 「私は賈島の詩を何度か朗詠した後に」(4点)

※「(私は) いくたびか一(賈島の詩を) 誦し一ける一に」の訳

×客体「賈島の詩を」がないものは不可×0点。

▲主体「私」がないものは▲減点1点。ただしB・C・Dで「私」とわかる文となっていれば減点しない。

○「朗詠」「口ずさむ」「声を出してよむ」「詠む」「読みあげる」など、声に出している要素があること。

▲声に出している要素がないものは▲減点1点。

○「読む」も可○。

○「いくたびか」の訳、「何度か」は無くても可。不問。

B 「漢字を五字六字変えて諧謔的な詩を作ったところ」(2点)

※「文字一五つ一六つ一かへ一たれ一ば」の訳

×「漢字(文字)を五字六字変えて」の要素がないものは不可。×0点。ただし、この要素を、「改編して」や

ロデイにして」「替歌を作って」等としているものは▲減点1点。

○「諧謔的な」の要素は無くても不問とする。

▲「たところ」「…てみると」「…すると」の要素が無いものは▲減点1点。

▲「…たので…だから」等「理由」を表す接続となっているものは▲減点1点。

C 「それは原作に比べると見劣りする」(2点)

※「(その詩は) わろう一聞(ゆる)も」の訳

※「(私が作った漢詩は) 原作に比べると見劣りする」「(私が作った漢詩は) 滑稽に感じられる」

「(私が作った漢詩は) 変に聞こえる」の要素が必須。無いものは不可×0点。

×「悪く聞こえる」は不可×0点。

D 「それも少しは興味がある」(2点)

※「ひとつは一興あり」の訳

※「(それも) 少しは**興味**がある」「(それも) 少しは**趣**がある」「(それも) 少しは**座興**として面白い」の

【趣がある】要素が必須。無いものは不可。

×「興味深い」は不可。

※「ひとつ」は「すこし」の意。よって、【趣がある】とあっても、それが沢山あるように感じられる表現は、不可×0点。(例：×「とても趣深い」)

(2) 10点

〔傍線部〕

姫小松一ひくま一の一野辺一の仮枕一げに一寝伸び一する一人一ぞ一おほかる

【注】に、「姫小松||小さな松。正月の子の日に、野に出て小松を引いたりして祝う、王朝時代から続く「子の日」という行事があった。」とある。これを踏まえる。

(模範解答)

A〇2点

B〇3点

C〇2点

小松を引いたりして祝う、優雅な野辺の宴「子の日」をする人は多いですが、この引馬野の仮の宿では、

D〇3点

お行儀悪く手足を伸ばして「寝伸び」している人が本当に多いことですよ。(10点)

※実際の目の前の情景は、CとDで、行儀が悪い「寝伸び」「ねのひ」をしている情景。

それと対応する正月の優雅な行事「子の日」(ねのひ)のイメージがAとBで、この2つが歌に詠まれている。

◆各加点要素の加点の条件【A・B・C・Dに関して部分採点】※ことばを補いつつ現代語訳する問題

A 「小松を引いたりして祝う」(2点)

※「姫小松ひくまの」の訳。【注】の「小さな松。正月の子の日に、野に出て小松を引いたりして祝う」を踏まえる。

○「ひくまの」が「引く」と「引馬野」の掛詞だとわかっていれば良い(「小松を引く」で〇)。

×ただし、「小松を引く」となっているとしても、「小松を引くの『引く』ではないが」のように、「姫小松」を序詞としている場合は、不可×。(「序詞」は普通二句以上になる)

○「小松」は単に「松」でも可。

○「祝う」の要素はなくても可〇。

B 「優雅な野辺の宴「子の日」をする人は多い」(3点)

※「げに一寝伸び一する一人一ぞ一おほかる」の訳①(イメージ)(※「寝伸び」↓「ねのひ(子の日)」(と、【注】「王朝時代から続く「子の日」という行事があった。」を踏まえる。

○「優雅な野辺の宴」は無くても可。「子の日」をする人は多い」があればB可〇2点。

×「子の日(をする)」だけでは×B不可。「子の日をする人が多い」まで必要。

○「げに」の訳（「本当に・なるほど」）は不問。

C「この引馬野の仮の宿」（2点）

※「ひくま」の一野辺一の仮枕」の訳

○「引馬野」は「引馬」でも可。その場合、「野辺」の訳は含まれないが、許容。  
○もちろん、「引馬の野辺」でも可。

×「仮枕」の訳は「仮の宿」。これが出来ていないとC不可×0点。単に「宿」は不可×、

D「お行儀悪く手足を伸ばして「寝伸び」している人が本当に多い」（3点）

※「げに一寝伸び一する一人一ぞ一おほかる」の訳②（目前の情景）

○「お行儀悪く手足を伸ばして」は無くても可。「寝伸び」している人が（本当に）多い」の要素があればD可○3点。

○「寝伸び」は優雅な「子の日」の対極にある「行儀悪い」行為なので、「寝伸び」という語が無くても、「行儀悪く寝ている人が多い」・「寝相の悪い人が多い」も可○。

○「寝伸び」は「寝ながら手足を伸ばすこと」なので、「手足を伸ばして（無造作に）寝る」という表現があれば可○。

○「げに」の訳（「本当に・なるほど」）は不問。

(3) 10点

〔傍線部〕

人の一のかしづく一婿君一など一の一来り一給ふ一に、酒一のみたち一て、「浜松一の一音一は」と一をのこども一の一うたふ一は、こ一の一所一の一こと一なら一ん一かし。

【注】に、「浜松の音は」当時の民謡の一節。足利義教が富士見のためこの地に下向した時、この松の下で酒宴を催し、「浜松の音はざざんざ」と謡ったことから、「颯々(ざざんざ)の松(まつ)」といわれていたという。とある。これを踏まえる。

(模範解答)

A〇5点

B〇2点

舅が大切に世話する婿君などが婿入りなさる時に、酒を飲み騒いで、「浜松の音は」などと男たちが謡う民謡は

C〇3点

この場所を謡ったものだろうよ。(10点)

◆各加点要素の加点の条件【A・B・Cに関して部分採点】※ことばを補いつつ現代語訳する問題

A 「舅が大切に世話する婿君などが婿入りなさる時に」(5点)

※「人一のかしづく一婿君一など一の一来り一給ふ一に、」の訳。

① 「舅が」(1点)

※「人一」の訳

※主体「人」の訳

× 「父親が」は不可。「舅(しゅうと)」は義理の父。夫あるいは妻の父。ここでは男が婿入りするので、婿の男からすると、妻の父。

× 「舅が」と、あっても、「舅」を②の「婿君」と同一人物に扱っている場合は①×0点。

② 「大切に世話する婿君」(2点)

※「かしづく一婿君」の訳

○ 「大切に世話する婿君」も可。

③ 「婿入りなさる時に」(2点)

※「来り一給ふ一に」の訳

※「来る」のは「婿君」なので、ここは『婿入り』のこと。

× 「婿入りする時に」のように、「給ふ」の要素がないものは③×0点

× 「結婚なさるときに」は不可③×0点。



B 「酒を飲み騒いで」、「浜松の音は」などと男たちが謡う民謡は「(2点)

※ 「酒一のみたち一て」、「浜松一の一音一は」と一をのこども一の一うたふ一は」の訳。

※ 【注】の、「浜松の音は」当時の民謡の一節。」を踏まえる。

① 「酒を飲み騒いで」(1点)

※ 「酒一のみたち一て」の訳

× 「酒を飲んで」「騒いで」など、どちらか一方の場合、不可×0点

② 「浜松の音は」などと男たちが謡う民謡は「(1点)

※ 「浜松一の一音一は」と一をのこども一の一うたふ一は」の訳。

○ 「男たちが謡う民謡は」は、「男たちが謡う歌は」「男たちが歌うのは」などでも可○。

C 「この場所を謡ったものだろうよ」(3点)

※ 「此一の一所一の一事一なら一ん一かし」の訳。

○ 「この場所を謡ったものだろう」「この場所のことを歌ったものだろうよ」「この地のことなだろう」等の表現で可○。(場所+推量)

× 「このことなだろう」や「この地のことだ」は不可

問一 10点

※賈島の漢詩の「却望并州是故郷」には、賈島のどのような心情がうかがえるか、説明する。

(模範解答)

A○3点

B○2点

都に帰ることばかりを思い続けて十年の歳月を過ごした 并州を離れ、桑乾河を渡り、振り向いたその瞬間に、

C○2点

D○3点

今まで仮の宿と思っていた并州に対して、まるで故郷のような愛おしさを感じた という心情。(10点)

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・C・Dの各要素に関して部分採点。

なお、文末のという心情…という文末処理ができていないときは、▲1点減点。「心情」という語でなくても、「心情」を表す語であれば動詞でも構わない。】

A「都に帰ることばかりを思い続けて十年の歳月を過ごした」(3点)

※漢詩の「客ニ舍 并州一已十霜。帰心日夜憶ニ咸陽一。」を踏まえた部分。

(訳：并州の旅暮らしも、もう十年になる。帰りたいと思う気持ちは日も夜も絶えることなく、ただ都の長安のことばかりを思い続けてきた。)

○「(并州では)都に帰ることばかりを思い続けて十年の歳月を過ごした」という要素があれば可。

▲事実誤認等があれば減点1点。

B「并州を離れ、桑乾河を渡り、振り向いたその瞬間に」(2点)

※漢詩の「無レ端更 渡 桑 乾 水。却 望ニ并州ニ」を踏まえた部分。

(訳：思いがけず、また渡ることになった、桑乾河を。并州の方を振り返ると)

○「并州を離れ、桑乾河を渡り、振り向いた時」「桑乾河を渡り、并州の方を眺めやった時」という要素があれば可。

C「今まで仮の宿と思っていた并州に対して」(2点)

※Dの、并州を離れた今「望ニ并州一是 故郷」という今の、并州に対する思いに対応する、今まで十年間并州に住んで「帰心日夜憶ニ咸陽一。」の時の并州に対する思い。

○「并州を仮の宿と思っていた」「并州は異郷だと思っていた」「并州を旅の途中だと思っていた」という要素があれば可。

D 「まるで故郷のような愛おしさを感じた」 (3点)

※漢詩 「一 望<sup>メバ</sup> 二 并州<sup>ヲ</sup> 一 是<sup>コレ</sup> 故郷」という、并洲を離れた今の、并洲に対する思い。

(訳：并洲は、今となってはかえって故郷のように懐かしく望まれる。)

○ 「并洲を故郷のように感じた」という要素があれば可。

問三 10点

※波線部「何につけても皆をかしや」としてほとんどさへわらふ」の人物（作者と話している、若くて実直な女性）は、**何をどのように感じているか**説明する。

※波線部の直前で、作者は催馬楽の本歌取りの歌を口ずさむが、若くて実直な女性は、その内容を下品と非難する。しかし、作者は、それはそうではないと、世間一般の価値観とは違った論（価値観）を展開する。そして、それは、今のものではなく昔からあるも価値観だと、もとの催馬楽を口ずさんだ。という状況が書かれている。

つまり、作者には、詩歌・古典文学・歌謡等の知識・教養や、若くて実直な女性をうならせる表現力があり、若くて実直な女性はそれを「をかし（面白い）」と感じている、ということ。

(模範解答)

A○2点

C○3点

作者の言うことを、詩歌・古典文学・歌謡等の教養においても、人間観察においても、

D○3点

B○2点

複雑な諧謔味を表現する才能においても、**すべてに面白いと感じている。**

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・C・Dの各要素に関して部分採点。】

A 「作者の言うことを」(2点)

※「何を」にあたる部分

○「作者の言葉を」「作者のことを」等とあれば可。

B 「すべてに面白いと感じている」(2点)

※「どのように感じている」にあたる部分

○「すべてに面白いと感じている。」「どのようなものも興味深いと感じている。」「どこをとっても素敵だ」と思っている。」「何もかもが興味あると思っている。」「等とあれば可。

C 「(詩歌・古典文学・歌謡等の) 教養においても」 (3点)

※若い実直な女性が「面白い」と感じている要素①

○ 「詩歌・古典文学・歌謡等の」は無くて可。

○ 「(文学的な) 教養(知識)」という点において「という要素があれば可」。

D 「(猥雑な諧謔味を) 表現する才能においても」 (3点)

※若い実直な女性が「面白い」と感じている要素②

○ 「猥雑な諧謔味を」は無くて可。

○ 「表現の才能という点において」という要素があれば可。